



眞っ白なジグソーパズル

【東京都】三品麻衣 みしな まい 34歳

宇宙飛行士になるための試験として、絵の描かれていないジグソーパズルを、チームになって組み立てるという課題がある、と聞いたことがあります。それと同じパズルを今、私は組み立てています。

事件に遭ったのは昨年の梅雨入り前でした。それが原因でPTSDの症状が始めました。元から発達・精神障害を持っていましたが、PTSDが加わって私の価値観はがらりと変わりました。「人はいざとなったら、私を裏切る」と感じていました。何より「元の自分が分からない」ということが私を苦しめました。これぞ、「真っ白なジグソーパズル」でした。そんな私に訪問看護師たちはしっかりと寄り添い、まよ真摯

に私の苦しみを受け止めてくれました。どの看護師も、バラバラになったパズルのピースを私と一緒に探してくれました。

ある日、私は、看護師の前でフラッシュバックを起こしました。私は、恐怖に耐えきれず、彼女の腕の中に飛び込みました。赤ちゃんが母親にしがみつこうように、私は彼女にしがみついて激しく泣いたのです。その時の彼女の言葉は、良い意味で私の心をぐざりと貫きました。

「三品さんが、苦しい気持ちを私の前で表してくれてうれしいです。ありがとうございます」

号泣したことに対して感謝されるとは、驚きでした。そしていつも穏やかな彼女が、私の目を見てき

ぱりこう言いました。「泣きたいときに泣かなかつたら、いつ泣くんですか？ 大人でも子どもでも、苦しかったら泣くものなんです」

そのとき、白いパズルのピースをあるべき場所にひとつ置けた気がしました。人を信頼したいという思いがもう一度生まれました。その白いパズルの組み立ては、私と訪問看護師1人1人との協働作業であり、私たちはパズルを完成させるためのチームメイトなのです。私たちはこれからも、一緒にピースを置いていくでしょう。いつかそれが、白色から、私という人間を表現した「絵」の描かれたパズルに変わると信じて。